2021/4/3@Shy　堀 千晶

古井由吉「二十世紀の岬を回り」（初出 2000 年）、『始まりの言葉』岩波書店、二〇〇七年、一四、一六—一七頁。「二十世紀の内へすでに十四年も入った事ではあるが、この〔第一次〕大戦を私は二十世紀の始まりとここでは取りたい」。「第一次大戦勃発から第二次大戦の終末までの、一九一四年から四五年までの間を、世界三十一年戦争と私は見たい。〔……〕国家および資本および科学技術の巨大化ということをさきほど十九世紀後半の事柄として挙げたが、これに権力の集中もふくめて、それらが現実に巨大な「機械」となり、当事者たちの制御を超えて、ほとんど自動的に作動しはじめたのが、この時代ではなかったか。そのもっとも凶悪な例がユダヤ人の大強制収容と大虐殺である」。
古井由吉「六十五年目」（初出 2009 年）、『エッセイ撰　私のエッセイズム』河出書房新社、二〇二一年、一七一—一七二頁。「すくなくとも半世紀にわたるこの国の経済成長も、もうひとつの戦争であった、とわたしは見る者である。武器弾薬こそ使わなかったが、あらゆる「大量（マス）」の方法と技術を挙げての、総動員戦であった、と。戦死者もすくなからず、心身の負傷者に至っては数知れぬことだろう。初めは踵（きびす）に迫る貧困が敵であったが、そのうちに敵の正体もはっきりしなくなり、くりかえし襲ってくる不況からの脱出がそのつど危急の要請となった。「景気回復」がかつての「聖戦」にひとしい合言葉となって叫ばれる」。

マリオ・トロンティ『自由な精神について　生と思考のフラグメント』Mario Tronti, « « Paix impossible, guerre improbable » », in *De l'esprit libre. Fragments de vie et de pensée*, trad. A. Savona, Éditions la Tempête, 2019, p. 112.「第三次世界大戦（一九四七—一九九一年）——日付が一九九一年であって一九八九年ではないという点を強調しておきたい——は、じっさいのところヒロシマヒロシマではじまった。大量破壊兵器が日本との戦争を終結させ、ＵＲＳＳとの平和を開始させたからである。〔……〕二〇世紀の第三次世界大戦は長期にわたる。なぜなら戦闘が行われないから、というかグローバル＝ローカルな水準で戦闘が行われることになるからだ（言語にたいする敬意の念があるから、グローカル（glocal）という言いかたはお断りだ）。〔……〕市場・マネー・生産の世界化は、それぞれの領土内に甚大な影響をもたらした戦争の世界化によって予見され、基礎をあたえられたものだ。戦争の世界化は、システムの論理とかんぜんに整合している。もちろん忘れているほかの戦争があることは承知のうえで、いくつか挙げるなら、朝鮮〔1950-53〕、スエズ〔1956-57〕、アルジェリア〔1954-1962〕、ヴェトナム〔1965-1975〕、イスラエル＝パレスチナ紛争〔1948-〕があるだろう。これらはネーションを超える次元をもったローカルな戦争であると同時に、ネーション内部の、ときにはブロック内部の内戦——東側諸国における「動乱〔叛乱 révolte〕」の場合のように——でもあった」。

マリオ・トロンティ『労働者たちと資本』Mario Tronti, « Lutte contre le travail » (1965), in *Ouvriers et Capital*, trad. Y. Moulier avec la collaboration de G. Bezza, Christian Bourgois, 1977, p. 322.「資本に対抗して闘うために、労働者階級は、資本としてのおのれ自身に対抗する闘いをおこなわなければならない。これは矛盾の最高段階である——ただし労働者にとってではなく、資本家にとって。十分にこの段階を劇化させ、この矛盾を組織化すれば、資本主義のシステムはもはや機能しなくなり、資本のプランは逆立ちして歩きはじめるだろう。〔……〕労働に抗する労働者運動、労働者としてのおのれ自身に抗する労働者の闘争、労働力が労働になることへの拒絶」（＊『千のプラトー』第１３プラトー、注６１に同書の引用）

マルグリット・デュラス『ヒロシマ・モナムール』工藤庸子訳、河出書房新社、二〇一四年、一〇—一六頁。「映画の冒頭では、ゆきずりの男女が姿をあらわすことはない。女も。男も。ふたりの代わりに見えるのは切断された肉体（des corps mutilés）である——頭と腰のあいだで切り取られ——うごめいている——愛欲あるいは末期の苦しみに悶え——その肌は徐々におおわれてゆく、ふりかかる原爆の死の灰によって、その水滴によって——さらには絶頂にいたる愛欲の汗つぶによって。」「地理的にも、哲学的にも、歴史的にも、経済的にも、人種的にも、その他の点でも可能なかぎり隔てられたふたりの人間のあいだで、ヒロシマはともに分かち合う土地（terrain commun）となるだろう」。「たがいに打ち明けるべき話もない。もはや身振りもない。／それでもまだ、ふたりは相手に呼びかけはするだろう。どんなふうに？　ヌヴェール、ヒロシマ、と（NEVERS, HIROSHIMA）」。
ジル・ドゥルーズ『シネマ２』法政大学出版局、二〇〇六年、二八八頁。「レネの映画の人物はまさにラザロ的であって、それは彼が死から、死者の国から復帰してくるからである。彼は死を通過し、死から生まれ、そのための感覚運動的な障害をかかえている。彼自身がアウシュヴィッツにいたわけでも、広島にいたわけでもないのに……。」

カントーロヴィッチ『王の二つの身体　中世政治神学研究』小林公訳、ちくま学芸文庫、二〇〇三年、上・二六五頁。（トマス・アクイナスにおいて）「教会とその構成員を一つの——あるいは何らかの——人体になぞらえる慣例上の擬人的比喩が、これよりもいっそう特殊な比喩、すなわち〈神秘体〉としての教会をキリストの個体としての身体——キリストの真のあるいは自然的な身体——になぞらえる比喩と、並列的に置かれているのである」。
古井由吉「二十世紀の岬を回り」、『始まりの言葉』前掲書、五—六頁。「六年後の一五四九年にはジェスイットの宣教師フランチェスコ・ザビエルが鹿児島に上陸した。切支丹伴天連（きりしたんばてれん）という観念が日本人の意識に埋め込まれることになった。そしてその四百年後の一九四九年、昭和二十四年に、ザビエル来日四百年祭が行われたその機会に、ガラスの容器に納められた、ザビエルの右腕が日本を「再訪」した。その写真を新聞で見て、小学校六年生の私は仰天したものだ。つい四年前の空襲の際に私を怯えさせた、西洋人の徹底性がここにも表れているように思われた。〔……〕教会建立の基（もとい）であった聖遺物信仰〔……〕」。

アンリ・マルディネ「リズムの美学」、『まなざし　言葉　空間』Henri Maldiney, « L’esthétique des rythmes » (1967), in *Regard Parole Espace*, Cerf, 2013 [1e éd. 1973], p. 206.（パウル・クレー『造形思考』冒頭からの引用——灰色＝カオスからの、空間が出てくる——のあとで）「視線がつかみどころを失ってしまうような、彷徨う線がもつれあう束——パウル・クレーはこれをカオスの例とする——と、飛躍によって一息に創設される起源から光を放つように広がりでる空間とのあいだには、《リズム》以外のなにものも存在しない。リズムによって、カオスから秩序への移行が成し遂げられるのである。ハンス・フォン・ビューローは「はじめにリズムありき」という。《リズム》とは深淵への第二の応答なのだ」（＊第一の応答は「眩暈（vertige）」）。
エミール・バンヴェニスト「言語上の用例における「リズム」の概念」、『一般言語学の諸問題』Émile Benveniste, « La notion de « rythme » dans son expression linguistique » (1951), in *Problèmes de linguistique générale*, Gallimard, 1966, pp. 327, 333.「人間の秩序を越えて、われわれはリズムを事物にも出来事にも投影する。かくなる「時間」、間隔、回帰にかんする考察をもとにした、人間と自然のこの壮大な融合」……「逆に、ῥυθμός〔rhuthmós〕が指し示しているのは、この語がもちいられる文脈によるなら、動きやすく可動的で流動的なものによって、一瞬だけ引受けられるフォルムであり、有機的な一貫性（consistance organique）をもたないもののフォルムである。〔……〕それは即興的で、瞬間的で、変容しうるフォルムなのだ」（→　プラトンの改変）。